

2026年 チュウヒ類の越冬期個体数一斉調査の概要

多田英行・平野敏明(チュウヒ保護ネットワーク)

●調査目的

チュウヒは環境省のレッドリストで絶滅危惧 IB類であり、2017年9月には「種の保存法」の希少種に指定されました。近年の調査により、国内の繁殖期のつがい数は130つがい程度であることが明らかとなり、これまでに報告されている繁殖成績の平均的な数値(成功率約40%×成功巣の巣立ちビナ約2.5羽)に基づいた計算を行った場合、繁殖期が終了した時点で400羽程度のチュウヒが国内にいることが推測されます。国内のつがい数の大部分は北海道が占めており、近年の観察結果からは北海道繁殖個体が越冬期には西日本まで広く渡来していることが示唆されています。

近年の報告によると、国内の繁殖地の中心となっている北海道の繁殖つがい数は減少しており、チュウヒの個体数減少が危惧されています。そのような背景の中、チュウヒの生息地では環境開発や植生遷移などによる生息環境の悪化が起きており、繁殖地と併せて越冬地の保全を行うことも重要視されつつあります。越冬個体数のモニタリングは、前年の繁殖成績の推定や、越冬地の生息環境の変化の把握につながることから、チュウヒの保全には欠かせない基礎情報となります。

そこで本調査は各地のチュウヒ観察者の協力を得ながら、2014年から越冬期の個体数のモニタリングを実施してきました。チュウヒは越冬期に集団ねぐらを形成し、越冬期の個体数は1月までに最大に達する傾向があります。このことから、1月に就時個体数をカウントすることで、越冬期のチュウヒの個体数を効率的に調べることができます。過去12年間の調査結果を比較したところ、全国的な個体数の増減や、気象条件と個体数の関係について明らかになりつつあります。そこで今年もチュウヒの一斉個体数調査を行うことで越冬期の生態を明らかにしたいと思います。また、これまでの調査を通じて、越冬環境の悪化やカメラマンによる就時妨害が、各地の就時個体数に影響を与えていた傾向が見られたことから、越冬地の環境変化についても併せてアンケート調査を行うことで、細かいスケールでの変化の要因を把握したいと思います。

なお、チュウヒの生息地ではハイイロチュウヒが観察されることがあります。これまでの調査でチュウヒとハイイロチュウヒでは個体数の増減に違いが見られており、このような違いを比較することで両種の生態の違いを明らかにできることが期待されます。調査中にハイイロチュウヒの就時を観察した場合には、ハイイロチュウヒの就時個体数も可能な限り記録することで、今後の基礎情報に活用していきます。

●調査方法

(1)調査内容

- ・チュウヒの就時個体数、環境変化のアンケート
- ・ハイイロチュウヒの就時個体数、環境変化のアンケート

※就時個体のカウントが困難な場合は、日中の個体数でも構いません。

※環境変化のアンケートは主観的な内容で構いませんので、今シーズン(調査時)の概要を分かる範囲で記入してください。

(2)調査日時

- ・2026年1月中のいずれか1日間(調査地が複数個所ある場合には、数日間に分けての実施も可)
※可能であれば渡良瀬遊水地の調査日(1月4日)に近い、1月上旬～中旬に調査してください。
- ・日没前1時間から日没後30分までの間を目安に調査してください。
※ねぐら全域が見渡せる場所では、早朝のねぐら立ちを調査しても構いません。その場合は日出前30分から日出後30分までの間を目安に調査してください。
- ※ねぐら入りの観察が困難だったり、ねぐらの場所が不明な場合は、日中に観察した最大個体数(羽衣の色や、羽の欠損などから個体識別ができた数)を報告していただいて構いません。

(3)調査地の選定条件

- 基本的には、チュウヒ類の越冬が毎年観察されている場所を調査対象地とします。
- ※偶然にチュウヒ類の生息を確認した場所や、1羽だけの観察例での報告でも構いません。また、チュウヒ類の生息の可能性がある場所であれば、観察結果が0羽だった場合の報告でも構いません。

(4)調査に関するアドバイス

- ・調査に際して、可能ならば事前にチュウヒの就時場所を特定しておき、好適な調査地点を選定すると効率的です。就時場所がヨシなどで見えにくい場合には脚立などを利用すると便利です。
- ・調査の際には就時行動を攪乱しないように、少なくとも200m程度かそれ以上離れた場所から静かに観察するよう心がけてください。
- ・個体数のカウントは、重複を避けるために一度入った個体が再び飛立たないか注意して観察し、飛立った場合にはその個体数を差し引いてください。
- ・ねぐらに降りるチュウヒは、高度を下げたあと一旦浮き上がるようにしてから1m位の高さから降ります。浅い角度で侵入し草むらに消えた場合には降りないで通過することが多いので注意が必要です。

●調査結果の送り先

- ・調査結果は多田英行か平野敏明までE-mailでお送りください。
- ・取りまとめの都合上、調査結果の送付は2月上旬までをめどにお願いします。

●調査結果の集計と公表について

(1)調査協力者への公表

- ・調査結果は、個体数と調査実施地点数を都道府県単位で集計します。(生息地への悪影響を避けるため、調査地名と位置情報は非公開とします)
- ・調査結果の一覧は、参加者にEメールで通知します。(3月上旬の予定)

(2)チュウヒ保護ネットワークでの公開

- ・チュウヒ保護への活用のため、個体数と調査実施地点数の総数をウェブサイト上に公開します。(各調査地や都道府県別の集計結果などの詳細は公表しません)

(3)その他

- ・調査員が自らの記録を公表したり、自らの論文などに利用することは妨げません。

・調査結果は取りまとめ側で学会や論文に適時発表させていただきます。

●これまでに寄せられた主な質問

Q1:本調査はチュウヒ保護ネットワークが行っているのですか？ また、調査結果はチュウヒ保護ネットワークに帰属するのですか？

A1:本調査は全国の有志による調査であり、実施主体はチュウヒ保護ネットワークではありません。そのため、ご提供いただいた個別の調査結果を、チュウヒ保護ネットワークが無断で利用することはあります。

Q2:他の参加者と調査地が被りそうなのですが、報告に差し支えありませんか？

A2:調査地が被った場合でも報告していただいて構いません。その際、観察個体数は取りまとめ側で補正させていただきます。なお、調査地の被りを避けることを希望される方は、事前に取りまとめ人までご連絡ください。

Q3:調査への参加は事前に表明しておく必要がありますか？

A3:事前の参加連絡は必須ではありません。調査を実施できた際に、事後報告として調査結果を送っていただいても構いません。

Q4:調査を実施できるのが1月下旬になりそうですが、構いませんか？

A4:1月の調査結果であれば、1月末の記録でも受け付けています。

Q5:諸事情により情報提供者の名前は伏せて欲しいのですが。

A5:調査結果の一覧には調査協力員の名前を記載していますが、匿名の希望があれば名前の記載はしないことも可能です。

Q6:団体ではなく、個人での参加も可能ですか？

A6:基本的には個人や有志複数名での参加を前提としているので、もちろん可能です。

【参考文献】

平野敏明・遠藤孝一・君島昌夫・小堀政一郎・野中 純・内田裕之. 1998. 渡良瀬遊水地における秋冬期のチュウヒのねぐら. *Strix* 16: 1-15.

平野敏明・遠藤孝一・野中純・川田裕美・内田裕之・堀江玲子・長野大輔・船津丸弘樹・植田睦之. 2010. 渡良瀬遊水地におけるチュウヒとハイイロチュウヒの越冬個体数の長期モニタリング. *Bird Research* Vol. 6, pp. A29-A42.

環境省. 2014. レッドデータブック 2014 2 鳥類. ぎょうせい, 東京.

日本野鳥の会. 2020. プレスリリース 2020.12.10「絶滅危惧鳥類「チュウヒ」の全国繁殖つがい数が明らかに」. 日本野鳥の会 HP.

日本野鳥の会愛知県支部・日本野鳥の会三重県支部. 2024. チュウヒサミット 2024 予稿集. 日本野鳥の会三重, 三重.

多田英行. 2015. 岡山県における越冬期のチュウヒとハイイロチュウヒの渡来時期と個体数の季節変動. *Bird Research* 11:A11-A19.

多田英行・平野敏明. 2015. 越冬期におけるチュウヒの全国一斉個体数調査と長期モニタリングの試み.

- 日本鳥学会大会講演要旨集 2015:146.
- 多田英行・平野敏明. 2017. 越冬期におけるチュウヒ類の全国一斉個体数調査(2014-2017). 日本鳥学会大会講演要旨集 2017:84.
- 多田英行・平野敏明. 2021. 越冬期におけるチュウヒ類の個体数の分布と変動. 日本鳥学会大会講演要旨集 2021:72.
- 多田英行・平野敏明. 2023. 越冬期におけるチュウヒ類の個体数と分布の変動(2014-2023). 日本鳥学会大会講演要旨集 2023:81.